

「基本の運動」の指導に関する一考察 —「基本の運動」の実施内容とその問題点を中心として—

Ein Studium über die Lehrmethode von Grundübungen in den Elementarschule
—Als Schwerpunkt ; Übungsinhalte und ihre Probleme—

清水 紀人*・布施 由紀**・高橋かおり***・佐藤 光毅*
Norihiro SHIMIZU, Yuki HUSE, Kaori TAKAHASHI & Kouki SATO

論文要旨

本研究は、「基本の運動」が実践の場において、どのように展開されているかについてアンケート調査を行い、検討し、以下の結果を得た。

1. 「基本の運動」の中で、最もよく取り上げて指導されているものは、「走・跳の運動」で、取り上げる理由の多くは「児童の発育・発達を考慮して、現在特に必要であるから」であった。これに対し、「模倣の運動」は、あまり取り上げて指導されているとはいえず、取り上げない理由として「教えるににくいから」という回答が多くみられた。
2. 「基本の運動」を指導する際の目標は、「楽しさを味わわせること」が最も多く、学習指導要領における目標と一致していた。これに対し、力強さ・ねばり強さ・スマートな身のこなし等の具体的な体力的目標は、あまり重視されているとはいえない。
3. 最も児童に欠けていると思っている運動要素に「柔軟性」をあげており、最も力を入れて指導しているものも「柔軟性」であった。「懸垂力」については、意識・強制的に指導している者と指導していない者とが2分されているため中・高学年に進んだ場合、力がついている、ついていないの両極端な児童を育てるという傾向になりはしないかという懸念もある。また、その他の運動要素の中にも、欠けていると思われるものの、意識・強調して指導されていないものもあるため、今後は、この問題を解決することが重要な課題といえる。
4. 指導法に関して多くの問題点を抱えており、中でも運動課題の組み合わせ・配列、運動内容の把握、児童の特徴、教科内容等が多かった。

I. はじめに

「基本の運動」は、昭和53年に改訂された小学校学習指導要領¹⁾²⁾の中に、それまでの第1学年から第6学年までの共通の運動領域（体操・器械運動・陸上運動・水泳・ボール運動・ダンス）

* 弘前大学教育学部保健体育科教室
Department of Health and Physical Education, Faculty of Education, Hirosaki University
** 板柳町立沿川小学校
Itayanagi, Soikawa Primary School
*** 八戸市立白銀南小学校
Hachinohe, Shioganeminami Primary School

を整理・統合し、低・中学年の新しい運動領域として設けられた。

この領域を設けた背景には、「体力」の向上を強調していた昭和43年の学習指導要領における反省と社会的要求に基づき、生涯体育（スポーツ）という新しい観点から「楽しさ」が強調されるようになってきた、という基本的な体育の目的の考え方の改変があった。

さらに平成元年に改訂され、平成4年から完全実施となった学習指導要領では、生涯スポーツへの基礎的教育がますます重視され、「楽しさ」が一層強調されるようになった。この方針の一つに、「子ども達の心身の発達特性と運動特性（楽しさ）との関わり合いをより一層明確にすること」が謳われた。「基本の運動」も同様にこの趣旨に基づいて、再検討され改訂されている。

新学習指導要領では、^{3) 4)}「基本の運動」の基本的な取り扱いのねらいを、小学校低・中学年の児童の運動能力や、児童の興味・関心・発達特性などに適合したものを取り上げること。個人的要素の重視、組織化・制度化されていない運動遊びを内容とすること。身体の基本的な動きや運動の基礎となる動きを「他者との競争」や「課題への取り組み」の形式で指導すること。等を表記している。

一方、指導の現場における、これらの説明要素に対する反応や対応についてみると、漠然としすぎていて、具体的指導内容に関してイメージできないという混乱等があることを度々聞かれることも事実である。

体育学習指導の基本問題として、松田は、⁵⁾運動を楽しく行うためには、どんなことを身につけなければならないか、という観点から学習内容が決められてくる面があることを忘れてはならないと述べている。さらに、運動の楽しさや運動の喜びが強調されるようになってきたために、子どもの好む運動を好むままに自由にやらせることが、これらの目標の達成につながるかのように短絡的に考えられる傾向にあるようである。このために、学習内容が無視されることさえあることも指摘し、学習内容が無視することのないよう警告している。

このような観点からすると、「基本の運動」の学習内容決定の場では、運動能力の構造から具体的課題を選択するのが妥当性が高くなるものと考えられる。運動能力の構造を松田は、⁶⁾「スポーツ技能」、「スポーツ構成技能」、「基礎的運動能力」、「基礎的運動要因」、「身体構造と機能」の5要因を段階的にとらえ、相互との関係から解説している。基本の運動は『⁶⁾』で表した2要因がまさに該当する要因である。体力的にこの2要因（要素）についてみると前者は、猪飼のいう神経系、後者はエネルギー系の体力に該当するとも考えられる。

発育発達から身のこなしのスムーズさの trainability の適時性については宮下が、⁷⁾様々なスポーツ種目において、その基盤となる動き方の基本は11才以下の子どもを対象として組み込まなければならないと述べているように、小学校低・中学年の適時性の高さが強調されている。

実際の指導は前述のごとく「楽しさ」と「体力」の両面を考慮した授業展開を行う必要がある。具体的なおさえ方としての授業のあり方については、一般的には教師の考え方に期待されるところが大きい⁸⁾が、加賀谷が述べているような「モデル授業」の作成ということも検討する必要があると考える。

以上のように基本の運動に関わって、種々の考え方、展開方法等があるが、確立されたものは見あたらない。

本研究は、教育現場における「基本の運動」の取り扱いの実態を把握し、指導のあり方の方向性を検討することを目的としている。

II. 方 法

調査方法は、質問紙調査法を用い、対象を青森県弘前市・黒石市・中津軽郡・南津軽郡の国公立の小学校85校とし、アンケート用紙の配布は各学校の教諭数（対象教諭は第1学年から第4学年までのクラス担任とした）に応じて行った。郵送形式で回収率は351/497, 70.6%であった。

調査の概要は、下記に示す5項目である。

- (1) 「基本の運動」の実施内容・状況について
- (2) 「基本の運動」の指導目標について
- (3) 「基本の運動」の指導上の問題点について
- (4) 学校の施設・設備・用具について
- (5) 児童の体力について

分析方法は、各項目についての単純集計および特定項目のクロス集計結果の比較分析を中心とした。

実施期日は、平成元年12月である。

III. 結果と考察

1. 実施内容・状況について

表1, 2に示すように「走・跳の運動」、「器械・器具を使つての運動」、「用具を操作する運動」、「力試しの運動」、「模倣の運動」の5つの運動内容から授業でよく取り上げて指導されているもの、あまり取り上げて指導されていないものをそれぞれ1番目から3番目まで順位づけしたものの実状をみる（なお、「水遊び」、「浮く・泳ぐ運動」、「雪上遊び」、「雪上運動」、「氷上遊び」、「氷上運動」等については季節、地域、環境等が実施に大きく影響すると思われる、選択肢から除いた）。

(1) 授業でよく取り上げて指導されている運動内容について

表1-1に授業でよく取り上げて指導されている「基本の運動」のうちの上位3位まで選択したものを示した。

回答総数288名のうち選択者総数（1番目～3番目までを加えた数）が最も多かったのは、「走・跳の運動」の276名であった。このうち1番目とした者は213名、2番目41名、3番目22名であった。

同様に次に選択者数が多かった「器械・器具を使つての運動」の247名についてみると、1番目とした者は32名、2番目105名、3番目110名であり、前述の「走・跳の運動」の1番目2番目、3番目の選択者数が逆転している。

以下、選択者数の多い順は、「用具を操作する運動」168名、「力試しの運動」123名、「模倣の運動」36名であった。

次に、これらの運動内容を選択した理由について表1-2に表した①～⑧項目のうちから上位1番目～3番目とするものを選択し、マークされたものについてみる。

選択者数が最も多かった理由は、①の「児童の発育・発達を考慮して、現在特に必要であるから」の183名で、この内訳は、1番目とした者76名、2番目70名、3番目37名であった。

同様に、次に選択者数が多かった理由は、②の「児童の日常生活の動き・遊びに結びつきや

すい運動だから」と③の「自分のクラス（学年）の児童の実態をみて、児童に欠けている体力を養うために必要であるから」の178名であった。

選択者数が少なかった理由は、⑥の「自分が教えやすいから」と⑦の「学校のカリキュラムとして、決められているから」で、同数の58名であった。⑧としては、学校行事に関わる内容と指導に関わる内容の5件が記載されていた。

さらに、各運動内容における1番目選択者の選択理由8項目の分布について表1-3（表1-1、表1-2のそれぞれ該当する総数の欄とは、前者でマークした者が必ずしも後者でマークしているとは限らず、またはその逆もあるため頻数が一致していない）に示した。

運動内容別に頻度の多い2項目の選択理由をそれぞれみると、「走・跳の運動」では、①の「児童の発育・発達を考慮して、現在特に必要であるから」が58名、②の「児童の日常生活の動き・遊びに結びつきやすい運動だから」が56名と多く、「器械・器具を使つての運動」は、①の「児童の発育・発達を考慮して、現在特に必要であるから」が11名、③の「自分のクラス（学年）の児童の実態をみて、児童に欠けている体力を養うために必要であるから」が9名、「用具を操作する運動」は、②の「児童の日常生活の動き・遊びに結びつきやすい運動だから」が9名、④の「児童が好む運動であるから」が5名で、選択者の少ない「力試しの運動」、「模倣の運動」も同様に①～④に分布する傾向があるといえる。

表1-1 授業でよく取り上げて指導されている「基本の運動」の内容(単位は人数、上位3位までの選択回答) N=288

	走・跳の運動	器械・器具を使つての運動	用具を操作する運動	力試しの運動	模倣の運動
1位選択者	213	32	26	11	5
2位選択者	41	105	72	59	7
3位選択者	22	110	70	53	24
合 計	276	247	168	123	36

表1-2 授業でよく取り上げて指導される理由(単位は人数、上位3位までの選択回答) N=288

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1位選択者	76	72	58	35	6	19	20	0
2位選択者	70	39	64	45	30	13	20	2
3位選択者	37	67	56	42	32	26	18	3
合 計	183	178	178	122	68	58	58	5

- ① 児童の発育・発達を考慮して、現在特に必要であるから
- ② 児童の日常生活の動き・遊びに結びつきやすい運動だから
- ③ 自分のクラス（学年）の児童の実態をみて、児童に欠けている体力を養うために必要であるから
- ④ 児童が好む運動であるから
- ⑤ 学校の設備、環境等の条件に適しているから
- ⑥ 自分が教えやすいから
- ⑦ 学校のカリキュラムとして、決められているから
- ⑧ その他

表 1-3 授業でよく取り上げて指導されている運動内容と理由(単位は人数、1位選択のみ) N=280

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	合 計
走 ・ 跳 の 運 動	5 8	5 6	4 0	2 4	3	1 5	1 5	1	2 1 2
器械・器具を使つての運動	1 1	4	9	2	2	1	3	0	3 2
用 具 を 操 作 す る 運 動	2	9	4	5	1	0	0	0	2 1
力 試 し の 運 動	4	2	1	2	0	2	0	0	1 1
模 倣 の 運 動	2	0	1	1	0	0	0	0	4
合 計	7 7	7 1	5 5	3 4	6	1 8	1 8	1	2 8 0

(2) 授業であまり取り上げて指導されていない運動内容について

表 2-1 に授業であまり取り上げて指導されていない「基本の運動」のうちの上位 3 位まで選択したものを示した。これは、(1)とは逆の見地から(1)と同様の方法で 5 つの運動内容から順に 3 つ選んでマークしてもらったもので予測されたことではあったが、(1)とは頻数では若干差がみられるものの全く逆の傾向を示した。

回答総数 288 名のうち選択者数が最も多かったのは、「模倣の運動」の 235 名であった。このうち 1 番目とした者は 180 名、2 番目 45 名、3 番目 10 名であった。

同様に、次に選択者数が多かった「力試しの運動」の 188 名についてみると、1 番目とした者は 54 名、2 番目 95 名、3 番目 39 名で、取り上げない内容として 2 番目に選択する者が多かった。また、「走・跳の運動」を 2 番目に選択する者が 10 名、3 番目とする者が 18 名おり、設問に対する解釈が必ずしも統一されていないとも考えられる。例えば、2 番目、3 番目に取り上げないとする者と、2 番目や 3 番目としては取り上げないとする者等少なくとも 2 通りある。本研究の設問の趣旨は前者であり、予測としてこの欄は回答なしを期待していたことから問題視される点といえるが、この 28 名については、後者の解釈でマークされたものとして理解することとした。

次に指導されていない理由を表 2-2 に表した①～⑦項目のうちから上位 1 番目～3 番目とするものを選択し、マークされたものについてみる。

選択者数が最も多かった理由は、②の「児童の日常生活の動き・遊びに結びつきにくい運動だから」134 名であった。この内訳をみると 1 番目とした者が 45 名、2 番目が 48 名、3 番目が 41 名であり、ほぼ同率とみなすことができる。以下③の「児童が好まない運動であるから」が 119 名、⑤の「自分が教えるににくいから」が 112 名、④の「学校の設備、環境等の条件に適していないから」が 103 名、①の「児童の発育・発達を考慮して、現在特に必要であると思われないから」が 91 名と僅かずつ減少していく傾向にあった。

(1)と(2)との順位変動をみると①が(1)では 1 位であるのに対して(2)では 5 位に、⑤ ((1)では⑥に該当)が(1)では 6 位であるのに対して(2)では 3 位にと、この 2 つの項の変動が大きい。更に、⑤の「自分が教えるににくいから」について 1 番目とした者をみると、58 名と①～⑦の 1 番目とした者のうちで最も高い頻数である。⑦のその他には、施設・設備・用具に関すること、指導に関すること(生徒の特徴、教科内容、運動内容の把握)、学校行事に関すること、カリキュラムに関すること等の内容が 35 件あった。

さらに、(1)と同様、各運動内容における 1 番目選択者のその選択理由 7 項目の分布について表 2-3 に示した。

運動内容別に頻度の多い2項目の選択理由をそれぞれみると、「走・跳の運動」は総数が0名、「器械・器具を使つての運動」は、②の「児童の日常生活の動き・遊びに結びつきにくい運動だから」が6名、④の「学校の設備、環境等の条件に適していないから」が2名、「用具を操作する運動」は、④の「学校の設備、環境等の条件に適していないから」が6名、②の「児童の日常生活の動き・遊びに結びつきにくい運動だから」が5名、「力試しの運動」は、④の「学校の設備、環境等の条件に適していないから」が10名、②の「児童の日常生活の動き・遊びに結びつきにくい運動だから」が9名、「模倣の運動」は、⑤の「自分が教えにくいから」が54名、③の「児童が好まない運動であるから」が29名で、「模倣の運動」以外の分野では②と④が比較的多く、「模倣の運動」では顕著に⑤が多くこれ以下③、②、①、④の順で徐々に減少している。この運動内容の「その他」が他の運動内容に比べ18名と多く、その内容は特別活動や他教科との関係とする記載がほとんどであった。

表2-1 授業であまり取り上げて指導されていない「基本の運動」の内容(単位は人数、上位3位までの選択回答) N=288

	走・跳の運動	器械・器具を使つての運動	用具を操作する運動	力試しの運動	模倣の運動
1位選択者	0	14	23	54	180
2位選択者	10	23	76	95	45
3位選択者	18	88	55	39	10
合計	28	125	154	188	235

表2-2 授業であまり取り上げて指導されない理由(単位は人数、上位3位までの選択回答) N=288

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1位選択者	32	45	37	36	58	15	26
2位選択者	30	48	59	35	24	13	3
3位選択者	29	41	23	32	30	13	6
合計	91	134	119	103	112	41	35

- ① 児童の発育・発達を考慮して、現在特に必要であると思われるから
- ② 児童の日常生活の動き・遊びに結びつきにくい運動だから
- ③ 児童が好まない運動であるから
- ④ 学校の設備、環境等の条件に適していないから
- ⑤ 自分が教えにくいから
- ⑥ 学校のカリキュラムとして、決められていないから
- ⑦ その他

表2-3 授業であまり取り上げて指導されていない運動内容と理由(単位は人数、1位選択のみ) N=263

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	合計
走・跳の運動	0	0	0	0	0	0	0	0
器械・器具を使つての運動	1	6	1	2	1	1	1	13
用具を操作する運動	2	5	1	6	3	2	1	20
力試しの運動	7	9	7	10	6	1	11	51
模倣の運動	23	26	29	20	54	9	18	179
合計	33	46	38	38	64	13	31	263

2. 指導目標について

図1の注)に示したイ～ホに該当する記号をマークしてもらい、イ～ホに該当しないとしたものについては、へ（その他）として記載してもらった（N=286）。

分布状態は、運動欲求を充足させ、運動をする楽しさを味わわせるが32.9%、中・高学年の運動種目のための基礎・基本づくりが24.5%、生涯スポーツに結びつけるための小学校段階における基礎づくりが18.2%と、それぞれ学習指導要領の趣旨に準拠したような結果が得られている。前述した実施内容・状況において運動内容として取り上げる理由の①の直接的目標であるホは、従来の学習指導要領にある動作の調整力の育成を意味することで、宮下が具体的目標としてあげているものではあるが、僅か6.3%であった。これをネガティブに考えると、序で懸念されたような学習内容の無視状態に陥る危険性があるようにも考えられる。ポジティブに考えると、スマートな身のこなし→中・高学年への移行の考慮→力強さ・粘り強さ…の一連の系統性を考慮するとホはあまりにも直接的すぎてこのような状態になったものと考えられる。

しかし、これらのデーターからはネガティブの要素とポジティブの要素の比率が把握できないことから今後、より直接的な調査方法が検討されなければならないと考える。

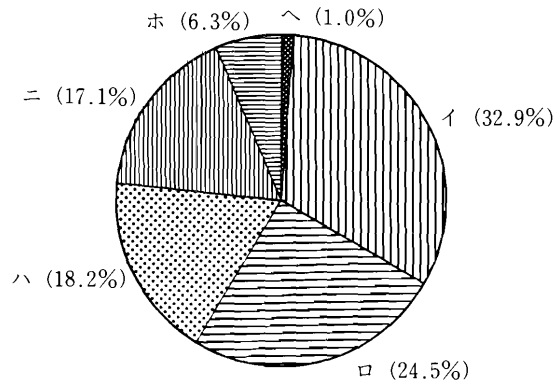


図1 「基本の運動」の指導上の目標について

- 注) イ. 運動欲求を充実させ、運動する楽しさを味わわせる
 ロ. 中・高学年の運動種目のための基礎・基本づくり
 ハ. 生涯スポーツに結びつけるための小学校段階における基礎づくり
 ニ. 日常生活や運動に必要な力強さやねばり強さを体得させる
 ホ. 日常生活や運動に必要なスマートな身のこなしを体得させる
 へ. その他

表3 担任からみた児童の体力・運動能力と指導の関係（単位は人数、上位5位までの選択回答）N=245

	運動要素が欠けている		合計	運動要素は欠けていない		合計
	指導している	指導していない		指導している	指導していない	
柔軟性	125	3	128	11	106	117
敏捷性	57	5	62	17	166	183
協応性	21	2	23	7	215	222
功緻性	25	5	30	7	208	215
支持力	36	15	51	10	184	194
懸垂力	59	30	89	3	153	156
腹筋力	46	14	60	5	180	185
背筋力	23	7	30	1	214	215
瞬発力	34	6	40	12	193	205
跳躍力	4	4	8	12	225	237
持久力	71	1	72	20	153	173
握力	6	7	13	1	231	232
走力	11	1	12	33	200	233
跳力	2	2	4	4	237	241
投力	21	15	36	3	206	209
表現力	17	22	39	4	202	206
逆さ感覚	20	11	31	4	210	214
バランス感覚	31	11	42	5	198	203
リズム感覚	18	12	30	14	201	215

3. 担任からみた児童の体力・運動能力と指導との関係について

設問を2つ設け、1つは現在体育を行う上で児童に欠けていると思われる運動要素があるか、否かを問い、あるとした者は下記の運動要素（体力・運動能力）19項目から欠ける度合の高いものから順に5つ番号をつけてもらう方法で行った。

項目：柔軟性、敏捷性、協応性、功緻性、支持力、懸垂力、腹筋力、背筋力、瞬発力、跳躍力、持久力、握力、走力、跳力、投力、表現力、逆さ感覚、バランス感覚、リズム感覚。

他の1つは現在、体育を行う上で上記の19項目の中で特に意識・強調して指導しているものがあるか、否かを問い、あるとした者は1と同様に19項目から意識・強調の度合の高いものから順に5つ番号をつけてもらった。

表3は前、後の問いの回答を事項4として項目19と組み合わせ、集計し示したものである。

欠けているか、否かの多少についてみると19項目中、柔軟性の1項目だけが欠けているが欠けていないより高率（128/245：52.2%）であった。このほか比較的高かったものをあげると懸垂力（89/245：36.3%）、持久力（72/245：29.4%）、敏捷性（62/245：25.3%）であった。

欠けていると判断されて意識・強制的に指導されているものを1位から5位まであげると、柔軟性 125名、持久力71名、懸垂力59名、敏捷性57名、腹筋力46名であった。同様に欠けていると判断されるが、意識・強制的に指導する5つには入らないとするものでは懸垂力30名、表現力22名、支持力と投力ともに15名、腹筋力14名であった。

これらのことから、特に問題視されるのは「懸垂力」があげられる。この運動要素については、欠けていると思っている者が89名いる中で意識・強制的に指導している者が59名、指導し

ていない者が30名おり、このような状態で中・高学年に進んだ場合、力がついている、ついていないの両極端な児童を育てるという傾向になりはしないかということである。

一方、欠けていないが意識・強調的に指導されているものについてみると、同様に1位から5位にあった項目は走力33名、持久力20名、敏捷性17名、跳躍力+跳力16(12+4)名、リズム感覚14名であった。

4. 指導上の問題点について

指導をする際に困っていること、問題点等について自由回答によって求め集約すると、以下の4つに大別された。

- 施設・設備・用具に関すること (47件)。
- 指導者の運動内容の理解に関すること (23件)。
- 指導法に関すること (58件)。
- 学校行事に関すること (22件)。

その中でも、指導法に関することが最も多く、それらは、運動課題の組み合わせ・配列、運動内容の把握、児童の特徴、教科内容等であった。つまり現場の教師は、指導法に関して多くの問題を抱えているということになる。

最近の児童は、運動能力の低下がみられ、疲れやすい傾向にあり、そのうえ怪我をする割合が高い、というように児童の特徴について問題を上げたものや、児童の運動能力や体力に大きな個人差があるという指摘も多かった。これは、児童の生活構造の変化に伴う、遊び内容の変化に起因している部分が、多分にあるものと考えられる。

よって、「基本の運動」を指導する場合、このような児童の実態を踏まえた上で、運動課題を精選し、安全な指導法を工夫して行かなければならないといえよう。

また、指導方法をよくつかんでいない、教材研究不足により授業がマンネリ化傾向になりやすい等という回答を考えると、日々の忙しさの中での教材研究は、教師にとって容易ではないという現状にあるといえる。よって、今後は、教師一人一人の教材研究とともに、学年間や校内全体の教師の共同による教材研究等によって、運動内容の理解・指導法の充実が図られるべきであり、加賀谷のいうモデル授業等を検討する必要性が高いのではないかと考える。

次に多かったのは、施設・設備・用具に関することで、その中でも特に、これらの不十分さを指摘しているものが多くみられた。固定施設(遊具)の不足のために、体育の授業や日常の遊び等を通して体力を高めることができない、小さな用具(棒、旗立て、なわ等)の不足により、円滑に授業をすすめることができない、体育館が狭いために児童が十分に動き回れる場を確保することが難しい等の問題である。したがって、今後は、体育だけではなく学校生活全体において、遊びを通じて、体力の向上・身のこなしの体得が成し得るような、施設・設備・用具の充実を図ることが必要であるといえよう。また、それと同時に、限られた条件の中では、教師の工夫によって施設・設備・用具の不足を補っていくという姿勢も大切であると考えられる。

指導者の運動内容の理解に関することでは、指導方法の教材研究不足と共通する点が多く、授業内容の偏り・マンネリ化等の問題をあげていた。

学校行事に関することでは、学校行事(例えば運動会・学芸会等)の練習に体育の時間が使われることが多いため、教科としての体育に時間をいかに確保するかが大きな課題であるという意見があった。

Ⅳ. まとめ

本研究は、「基本の運動」が実践の場において、どのように展開されているかについてアンケート調査を行い、検討し、以下の結果を得た。

1. 「基本の運動」の中で、最もよく取り上げて指導されているものは、「走・跳の運動」で、取り上げる理由の多くは「児童の発育・発達を考慮して、現在特に必要であるから」であった。これに対し、「模倣の運動」は、あまり取り上げて指導されているとはいえず、取り上げない理由として「教えるににくいから」という回答が多くみられた。
2. 「基本の運動」を指導する際の目標は、「楽しさを味わわせること」が最も多く、学習指導要領における目標と一致していた。これに対し、力強さ・ねばり強さ・スマートな身のこなし等の具体的な体力的目標は、あまり重視されているとはいえない。
3. 最も児童に欠けていると思っている運動要素は「柔軟性」をあげており、最も力を入れて指導しているものも「柔軟性」であった。「懸垂力」については、意識・強調的に指導している者と指導していない者とが2分されているため中・高学年に進んだ場合、力がついている、ついていないの両極端な児童を育てるという傾向になりはしないかという懸念もある。また、その他の運動要素の中にも、欠けていると思われるものの、意識・強調して指導されていないものもあるため、今後は、この問題を解決することが重要な課題といえる。
4. 指導法に関して多くの問題点を抱えており、中でも運動課題の組み合わせ・配列、運動内容の把握、児童の特徴、教科内容等が多かった。

以上のことから、「基本の運動」に関するいくつかの問題点が把握された。これらの問題点を少しでも改善して行くためには、「基本の運動」を正しく捉え、児童の実態に合った目標・内容を定め、指導方法を工夫していくことが大切といえる。なお、指導の具体的方法、並びに学習効果等については、今後、多くの事例研究等により、これを集約し体系化していく必要があると考える。

謝 辞

本研究をすすめるにあたり、弘前市、黒石市、中津軽郡、南津軽郡の国公立の小学校校長をはじめ、諸先生方に多大な御協力をいただいたことを心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部省：小学校学習指導要領，pp.91～100，1977，7．
- 2) 文部省：小学校指導書 体育編，pp. 6～17，1978，5．
- 3) 文部省：小学校学習指導要領，pp.98～104，1990，3．
- 4) 文部省：小学校指導書 体育編，pp. 1～7，1990，6．
- 5) 松田岩男：体育心理学，大修館書店，p.234 p.240，1979．
- 6) 松田岩男，小野三嗣：スポーツマンの体力測定，大修館書店，pp.161～16 3，1965．
- 7) 宮下充正：子どものからだ 科学的な体力づくり，東京大学出版会，p.161，1980，8．
- 8) 加賀谷照彦：体力を高める体育授業のあり方，体育の科学，pp.41～45 Vol30- 1，1980．